

4月総評

西駄 かずよし

ばあちゃんのさっぱりは
サイダーのこと

藤田 ゆきまち 三重県

何気ない祖母の口癖に、微笑ましさを感じるのは、そこに語り手のあたたかな眼差しがあるからだろう。同じ作者の作品に「絶交はなしにしょっかさくらんぼ」というのがあるが、そこにも同様の眼差しを感じる。

つうかくをさしだしているにちょ
うび

小野寺 里穂 東京都

安息日と言われることもある日曜日が、痛覚を差し出す理由を思う。その日は時間が止まっているかのように感じられる。

罪線は確かにいとしい波でした。

Im 沖縄県

罪線といとしい波との間にはイメージにおいて隔たりがあるが、「確かに」という強い口調から、語り手の思いが伝わってくる。どうしても、いとしい波でなければならない理由が語り手にはあるのだ。

のり弁の湿った甘いおかかだけ
枯れた芝生に敷き詰めときたい

マズルカ 山口県

甘いおかかが好きなのか苦手なのかについては触れられていない。しかしそれだけを枯れた芝生に敷き詰めておきたいという、通常の感覚とはかけ離れた願いを書くことで、言い表すことのできない複雑な感情そのものに肉薄しようとしている。

困ったらアを選ぶような僕だから
赤点だったし、さよならだったし

あお 奈良県

テストの選択肢を選ぶときの僕を書いたのだろうか。「赤点だったし、さよならだったし」という書きぶりに赤点にも負けない語り手のユーモアを感じる。

つくしんぼ
「か行」の友になってくれ

小林紅石 埼玉県

友になってくれということで、「か行」の寂しい横顔が浮かぶ。関係性から離れ、材料となつた「か行」という言葉。だからこそ、それは寂しさの象徴となるのだ。

防波堤ごしの夏をあつめています

渡辺 あみ 東京都

『防波堤ごし』と書くとき、そこに遙かなものを感じるのは私だけだろうか。語り手のあつめる夏は、届きそうで届かないところにこそあるのかもしれない。

ごみ収集車の中の夜

氷丸 茨城県

当たり前のことだけれども、真っ暗なごみ収集車の中にも夜は来る。昼夜の関係の無いところにも夜が来るということは、ある種の救いでもある（個々に訪れる死のように）。逆に個々に訪れない死とは、数として數えられる死であって、名前をはく奪されたそれとも言える。夜が来ることで、ごみ収集車が、はじめて自身をとりもどしたかのように見えるのは、そこにごみ収集車の固有性を見るからに他ならない。

プロペラがまわりだしたら長靴を
脱ぐ ともだちの頃の匂いで

白野 新潟県

ともだちの頃の匂いで長靴を脱げば何かがもどってくるのかもしれない。
だから君はプロペラがまわりだすのを待っているのかもしれない。

もともとはオレンジジュースが
入ってた缶を吸い殻入れにする人

宇井 麻千 大阪府

オレンジジュースを入れられるために作られたものが容易に吸い殻入れに変わってしまうような、日常のなかの残酷さの側面を鋭く描写している。愛する人が死んでもお腹が空くといった当たり前の側面。書き手はそうした側面に敏感である。同じ作者の作品に『注射針を血管に刺す／抜くときの／閉じられる皮膚の裏の暗がり』があるが、『暗がり』という言葉の中にも同様の視線を感じる。

七三分けの
六の気持ちを考えるあなたは
きっと世界を救う

君風 波音 大阪府

六の気持ちを考えるあなたが、そのまま世界につながるという「私」の意識の過剰は、通常の方法では、もはや世界とつながることはできないという感覚の裏返しだろう。世界の規

範が不確かな現代において、世界と自身を繋ぐよすがが「私」という意識でしかないという不安定感と無力感は、『きっと世界を救う』という反語にも似た言葉に集約される。同じ作者の作品に『牛丼をスプーンで食べる君といて／僕らの春の無数の入り口』という作品があるが、『無数の入り口』と書くことによって、自由における選択の不可能といった現代の苦悩を上手く表現している。